

美術館 まず見てほしい「作品」は

論説主幹 大野博人

朝日新聞 2013年11月3日

(青太字は引用者による)

パリのルーブル美術館で見逃せないのはモナリザやミロのビーナスだけではない。入り口のわきにも目を引くものがあつた。入館料金表だ。

常設展12ユーロ、音声ガイド5ユーロなどのあとに「入館無料」の項が続く。「18歳未満」「欧州の18歳から25歳」「障害者と付き添い」。次にこうある。

「失業者、生活保護受給者」

日本ではあまり見ないけれど、どういう考えによるのだろうか。よく利用されているのだろうか。ルーブルのエルベ・バルバレ副館長に話をきいた。

それによると、常設展への年間入館者は2012年で約900万人。そのうち無料入館者は40%にも及ぶ。多くは、若者や子どもたち。生活が苦しい人たちはというと――。

「数はかなり限られています。ただ、貧しくて来ない人たちにとってブレーキはお金だけではなくありません。恥ずかしいという気持ちや芸術作品への気後れもある。こちらから彼らの手を取りに行かなければ」

だから、市民団体などと組んで、貧しく移民が多い地域の住民や学校の生徒たちをバスを仕立てて連れてくる活動などに取り組む。何もしなくても大勢が押しかけるルーブルが、無料入館者を増やすのに力を注ぐ。

――

仏19世紀の作家ゾラの小説「居酒屋」に、ルーブルを訪れる貧しい庶民一行の描写がある。難破船の遭難者たちを描いたジェリコーの傑作「メデューズ号のいかだ」に息をのみ、ムリーリョの聖母像に感動する。

芸術に無縁だった人たちが、その力に心を揺さぶられる様子が印象的だが、その一行が入館料を払う場面はない。それもそのはず、当時はだれでも無料だった。

ルーブルはもともと宮殿だったが、大革命の4年後の1793年に生まれ変わる。仏文化通信省のジャクリーヌ・エデルマン公共政策部長は「特権階級のものだった芸術作品は、革命で国のものになった。ならば、国民だれもが無料で接することができなければならない。それがフランスでの美術館の精神の基礎となった」と説明する。

だが、第1次大戦で国家財政が逼迫（ひっぱく）。1922年、ついにルーブルはじめ国立の施設が有料に。だが、1959年に初代の文化相となった作家アンドレ・マルローも「文化は無料であるべきだ」とこだわりは捨てず、その後も各地の美術館で無料部分が増えたり減ったりが繰り返される。

「美術館に足を運ばなくても生きていけます。でも、自分がある作品に感動した多くの人たちのひとりだと感じる。それは、同じ共同体に暮らすひとりの市民だと感じることに通じます」と副館長。文化は人々を統合するというわけだ。また、仏NGO「失業者と弱者の国民運動」の幹部、ピエールエドゥアール・マニャン氏は**「美は余裕のある人たちのためだけにあるのではない。困難にある人ほど、文化を通して苦しい境遇以外のことに思いをはせる時間が必要だ」という。**

これが、料金が壁になる人にはそれを除くという考えにつながる。

— —

ルールのように貧しい人を無料入館対象に含む美術館のほか、世界には全面無料の施設もある。さて日本は？
博物館法の23条にこうある。

「公立博物館は、入館料その他博物館資料の利用に対する対価を徴収してはならない」

実は日本も無料が原則の国なのだ。ただ条文は、やむをえない場合は徴収できると続く。また、生活保護受給者や失業者を無料入館の対象にしている施設は、北海道や茨城県などにあるけれど、国立の美術館、博物館はそうになっていない。日本にとっても理想と現実のギャップはまだ大きいようだ。

今日は文化の日。美術館や博物館に出かけたなら、その料金表もじっくり鑑賞してみては？

傑作か、問題作か。社会と文化の関係を考える手がかりになるかも。